大村の文吾郎どん

むかし、むかし。

大村の里に文吾郎どんという、それはそれは、たいそうひどいけちんぼうが住んでおった。

文吾郎どん、決して魚を買わぬ。野菜をにるときはいつもなべぶたの裏に鯛の型を打ちつけたものを使うてにていたそうな。飯を食うときには、いつも鯛の絵のついた皿をぜんに供えて食うていたと。鯛の絵を見て、梅干しを一つなめなめ飯を食う。その梅干し、一回につき、一個食うのではない。湯をかけて、ふやかしたり、しょうゆをつけては、何日も何日も同じ梅干をねぶっていたと。

ある日のこと。里のもんが、文吾郎どんに鯛をみやげに持ってきて話しこんでおった。話が終わると何を考えたんじゃろうか、文吾郎どん、にわかに立ち上がって、

「この大飯食らいめ。」

と言うて、みやげの鯛を、裏の畑の中にうめこんでしもうた。おどろいた里のもん、

「おいおい、文吾郎。なんでまた、そげえひでえこつする。せっかくのおどのみやげ、もってねえこつするんじゃねえ。」

と言うてとがめると、文吾郎どん、真っ赤な顔して腹をたてておった。

「けんど、おまえ…。こん鯛がありゃあ、おどは飯を何ばいでん食う。そんで、大飯食らいにならあ。もってねえ話じゃ。ほれ、これば見い。」

そう言うと、文吾郎どん、なべのふたを持ってきて、そん裏板を里のもんに見せおった。そん裏板には、しっかりと鯛の型がほりこまれておったそうな。

「これで、飯もそげえ食わんですむわい。」

里のもんは、あきれてしもうて帰って行ったそうな。そんなこんなで文吾郎どんの家には、何一つない。仏様の灯明をともすにしても、赤くうれたとうがらしをあげておった。そのうち、そんとうがらしもあげんようになって、仏様に参る前、ぴかぴかと言って参ったそうな。

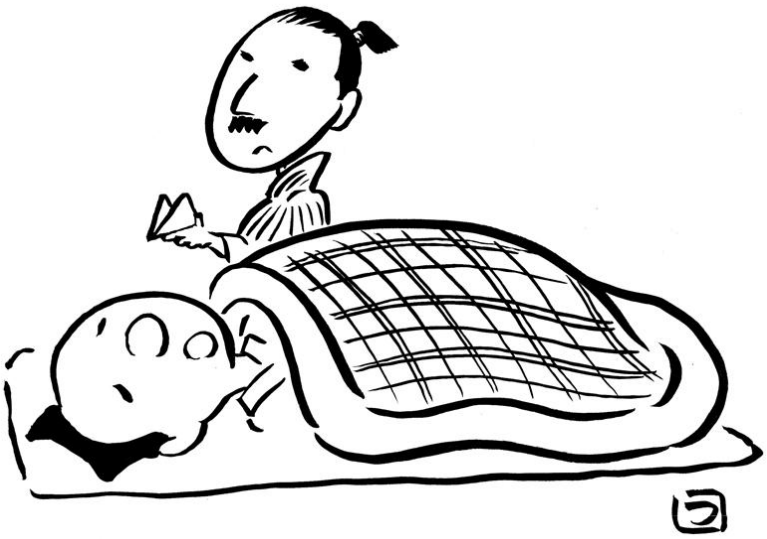
そういうことだから、文吾郎どん、とうとう、重い病気にかかってしもうた。家のもんがおどろいて医者をよんだ。文吾郎どん、まったく血の気のない顔をしちょる。

「これを飲めばすぐ治るぞ。」

そう言うて、親切な医者が粉薬を飲ませると、文吾郎どん、どうやら、顔に赤みがさしてきおった。

「ウウウッー。」

と気を取りもどした文吾郎どん、目をぱっちりと開けた。ところが医者がまくら元に来ておる。医



者の顔をみたとたん、
「ウウウー。ウウウー。」
とうなって、今度は息も絶えんばかりの重体になってしもうた。
「こりゃひどい。この薬で治らんとなると、もう手のほどこしようがない。こりゃあ高い薬じゃが、死んでしまえば何にもならん。ただのようなもんじゃ。」
と医者がつぶやいた。その時じゃった。
「ただ、ただかあ。」
と言って、文吾郎どん目をぱっちり開け、息をふき返したと。あきれかえった医者は何も言えんじゃったと。
何とまぁ、変わり者でケチな文吾郎どんじゃったが、人にはとても良くしたそうじゃ。自分に厳しく他人に優しく、村のためにはたいそうつくした、まじめな働き者じゃったそうな。

（亀田清美）

大村の遠景